

矢立のちび筆

永井荷風

青空文庫

或^{ある}人^{ひと}に答^{こた}ふる文^{ぶん}

思へば千九百七、八年の頃のことなり。われ多年の宿望を遂げ
得て初めて巴里^{パリ}を見し時は、明^あくる日を待たで死すとも更に怨^{うら}む
処なしと思ひき。泰西^{たいせい}諸詩星^{しよしせい}の呼吸する同じき都の空気をばわ
れも今は同じく吸ふなり。同じき街の敷石をば響も同じくわれも
今は踏むなり。世界の美妓名媛^{びぎめいえん}の摘む花われもまた野に行かば同
じくこれを摘むことを得ん。われはヴェルレエヌの如くにカツフ
エーの盃^{さかずき}をあげレニエーの如くに古城を歩み、ドーデの如くにセ
ーヌの水を眺め、コツペエの如くに舞^ぶ蹈^{とう}場^{じょう}に入り、ゴーチエー

の如くに画廊を徘徊しミュツセの如くにしばしば泣きけり。かく
てわれは世に最も幸福なる詩人となりぬ。如何いかんとなればわれは崇あが
め祭るべき偶像あまた持つ事を得たればなり。十七世紀以降二十
世紀に至る仏蘭西文芸史上にその名を掲げられしものは悉くわが
神なりけり。然れどもわれは仏蘭西語にて物書く事能はざりしか
ばやむなく日本語を以てわが感想を述べ綴つづりき。この弱点は忽たちまち
怪我けがの功こうみよう名なとなりぬ。もしわれにして恣ほしいままに仏蘭西文をものし
得たらんには、軽々しくジャン・モレアスを学びて外人にして仏
蘭西文壇ぶんだんに出るも豈難あにかなからんやなど、法外の野望を起したらんも
知るべからず。然れども幸さいわいなる哉かな、わが西洋崇拜の詩作は尽く日
本文となりて日本の文壇に出づるや、当時文壇の風潮と合致する

処ありければ忽ちたちま虚名を贏ち得たりき。けだし偶然の事なり。

歲月そうそう匆匆十歳に近し。われ今当時の事を顧れば茫ぼうとして夢

の如しといはんのみ。如何いかんとなればわれまた当時の如き感情を以

て物を見る事能はざればなり。物あるひは同じかるべきも心は全

く然しからず。われは当初日本の風景及び社会に対しても勉つとめてピエ

ール・ロッチの如き放浪詩人の心を以てこれを觀みる事を得たりし

が、氣候、風土、衣服、食品、住居の類は先づわが肉体を冒おかして

漸次ぜんじにわが感覺を日本化せしむると共に、当代の政治並に社会の

状態は事あるごとに宛然えんぜんわれをして封建時代にあるの思おもいあら

めき。もし封建の語を忌いまば封建の美点を去りてその惡弊をのみ

保存せし劣等なる平民時代といはんこそ更に妥當なるべけれ。

空想は漸次に破壊せられぬ。われは或一派の詩人の如く銀座ぎんざどの燈火とうかを以て直ちにブウルヴァールの賑にぎわいに比し帝国劇場を以てオペラになぞらへ日比谷ひびやの公園を取りてルキザンブルに擬ぎするが如き誇張と仮設を喜ぶ事能はずなりぬ。そは江戸時代の漢學者が文字もんじの快感よりしてお茶の水を茗溪めいけいと呼び新宿しんじゆくを甲こうえ駒きまたは峽きやうえき駒きと書したるよりも更に意味なき事たるべし。われは舶来ぶどうしゆの葡萄酒と葉卷はなはだの甚高価なるを知ると共に、蓄音ちくおん機きのワグネルと写真板のゴオガンのみにては、到底西洋の新芸術を論ずる事能はざるに心付きぬ。日本の文学者の事業は舶来新着の雑誌新聞に出でたる小説評論を読む事のみには限らざるべし。われは西洋の小説を読みその作家の生活を想像しひるがえ翻ひるがえつてわが日

本の現在を目撃する時常に不可思議の思なくんばあらず。露西亞ロシアの小説家ゴルキイは貧しくして家なきものなりといふ。然るになほ妻を伴ひて久しく伊太利亞イタリアに遊べり。日本人にして家族と共に伊太利亞に遊び得るもの果して幾人かある。ピエール・ロツチはふつこく仏国海軍の士官たり。長崎に泊はくして妓女ぎじょに親しみ、この事を小説につづりて文名を世界に馳はせしめき。もしロツチをして日本帝国の軍人たらしめんか風紀問題は忽ち彼をして軍職を去らしむるに終りしならん。われかつて『ウイルヘルム・テル』の劇を見たりにし時、虐しいたげられしといふ瑞西スイツルの土民、その暴主と問答する態度の豪気ある事、決してわが佐倉宗五郎さくらそうごろうの如き戦々兢兢たるの比に非あらざる事を知れり。ハムレットはその叔父を刺す事につきて

は多く煩悶はんもんせざりしに似たり。泰西たいせい文学は古今の別なく全く

西洋的にして二千年來の因習を負へるわが現在の生活感情に關係なき事あたかも鵬程ほうてい九万里の遠きに異ことならず。

わが身常に健すこやかならず。寒暑共に苦しみ多し。かつて病褥びようじよくに

ありてダンヌンチオの著作を読むや紙面に横溢する作家の意氣甚だ豪壯なるを感じ、もし余にして彼の如き名篇を出さんとせば、

芸術の信念を涵養かんようするに先立ちてまづ猛烈なる精力を作り、暁ぎようめいしゅんめ

明駿馬に鞭打つて山野を跋渉ばつしょうするの意氣なくんばあら

ずと思ひ、続いて厩うまやに駿馬を養ふ資力と、走るべき広漠たる平野

なからざるべからざる事に心付きたり。これよりしてダンヌンチオの著作は余に取りてあたかも炎天の太陽を望むが如くになりぬ。

西洋近世の芸術は文学はいふも更なり、絵画彫刻音楽に至るま
 でまた昔^{せきじつ}日の如く広漠たる高遠の理想を云々^{うんぬん}せず概念の理論
 を排してひたすら活^いける生^{せい}命^{めい}の泉を汲まんとす。信仰の動揺よ
 り来^{きた}りし厭^{えん}世^{せい}懷疑の世は過ぎて、生命の力の發揮する処^{こゝ}爰に深
 甚の歡喜と悲痛を求む。われ元より世界の思想に抗せんと欲する
 ものに非ずといへども、わが現在の生活を以てしては彼^かのヴェル
 ハアレンの詩に現れしが如き生命の力は時として余りに猛烈莊嚴
 に過ぐるを如何にせん。西洋近代思潮は昔日の如くわれを昂奮刺
 ※せしむるに先立ち^{いたずら}て徒に現在のわれを嫌^{けん}惡^おせしめ絶望せしむ。
 われは決して華々^{はなばな}しく猛進奮闘する人を忌^いむに非^あらず。われは
 唯^{みづか}自^{みづか}らおのれを省みて心ならずも暗く淋しき日を送りつつしかも

騒^{さわ}し氣^がに嘆^{なげ}かず憤^{いきどお}らず悠々として天分に安んぜんとする支那の隱者^{いんしや}の如きを崇拜すといふのみ。ここにおいて江戸時代とまた支那の文学美術とは無限の慰安を感じしむるに至^{いた}れり。これらの事われ既に幾^{いくたび}度かわが浮世絵論^{うち}の中に述ぶる所ありき。

我は今、わが體質とわが境遇とわが感情とに最も親密なるべき芸術を求めんとしつつあり。現代日本の政治並びに社会一般の事象^{しやう}を度外視したる世界に遊ばん事を欲せり。社会の表面に活動せざる無業^{むぎよう}の人、または公人^{こうじん}としての義務を終^おへて隠退せる老人等の生活に興味を移さんとす。墻^{しやう}壁^{へき}によりて車馬往来の街路と隔離したる庭園の花鳥^{かちよう}を見て憂苦の情を忘れんとす。人生は常に二面を有すること天に日月あり時に昼夜あるが如し。活動

と進歩の外に静安と休息もまた人生の一面ならずや。われは主張の芸術を捨てて趣味の芸術に赴おもむかんとす。われは現時文壇の趨勢を顧慮せず、国の東西を問はず時の古今ここんを論ぜず唯最もわれに近きものを求めてここに安やすんぜんと欲するものなり。伊太利亜未来派の詩人マリネツチが著述は兩三年前ぜんわれも既にその声名を伝つたえ聞ききて一読したる事ありき。然れどもその説く所の人生驀ばくしん進の意気余りに豪壮に過ぐるを以てわれは忽ちこれを捨てて顧みざりき。われは戦場に功名の死をなす勇者の覚悟よりも、家いえに残りて孤児を養育する老母と淋さびしき暖炉の火を焚ろうやく老爺の心をば、更に哀れと思へばなり。世のしを罵りて憤死するものよりも、心ならず世に従ひ行くものの胸中に一層の同情なくんばあらず。

世に立つは苦しかりけりこしびようぶ腰屏風

まがりなりには折りがめども

われ京きょう伝でんが描ける『狂歌五十人一首』のうち中に掲げられしこ

の一首を見しより、始めて狂歌捨てがたしと思へり。

されど我は人に向つて狂歌を吟ぜよ浮世絵を描け三味線を聴け
と主張するものに非らず。われは唯西洋の文芸美術にあらざるも
なほ時としてわが情じようかい懷かいを託するに足るものあるべきを思ひ、

故国の文芸中よりわが現在の詩情を動うごし得るものを発見せんと勉つと
むるのみ。文学者の事業は強しひて文壇一般の風潮と一致する事を

要せず。元もとこれ営利の商業に非らざればなり。一代の流行西洋を

迎ふるの時に当り、文学美術もまた師範を西洋に則のつとれば世人に喜

ばるる事火を見るより明かなり。然れども余はさほどに自由を欲せざるになほ革命を称^{とな}へ、さほどに幽玄の空想なきに頻^{しきり}に泰西の音楽を説き、さほどに知識の要求を感じざるに漫^{みだ}りに西洋哲学の新論を主張し、あるひはまたさほどに生命の活力なきに徒^{いたずら}に未来派の美術を迎ふるが如き輕拳を恥づ。いはんや無用なる新用語を作り、文芸の批評を以て宛^{さな}ら新聞紙の言論が殊更問題を提出して人氣を博するが如き機敏をのみ事とするにおいてをや。

われは今自ら退^{みずかしりぞ}きて進取の氣運に遠ざからんとす。幸ひにわが戯^げ作者氣質^{しゃかたぎ}をしていはゆる現代文壇の急進者より排斥嫌惡せらるる事を得ば本懷の至りなり。因^よつて茲^{こゝ}にこの一文を草す。

大正三年甲寅初春

青空文庫情報

底本：「荷風随筆集（下）」岩波文庫、岩波書店

1986（昭和61）年11月17日第1刷発行

2007（平成19）年7月13日第23刷発行

底本の親本：「荷風随筆 一〜五」岩波書店

1981（昭和56）年11月〜1982（昭和57）年3月

※ルビは新仮名とする底本の扱いにそって、ルビの拗音、促音は
小書きしました。

入力：門田裕志

校正：阿部哲也

2010年3月9日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

矢立のちび筆

永井荷風

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>